「大樹」打ち上げへ宇宙実験

北海道衛星の佐鳥社長ら

JAXAロケットに超小型機

【札幌】北海道工業大の佐鳥新助教授を中心とする研究グループは、宇宙航空研究開発機構（JAXA、東京）が来年9月に打ち上げ予定の「M－Vロケット7号機」に超小型衛星を搭載し、宇宙での実験を行う。佐鳥助教授は北海道衛星「大樹」（2007年度打ち上げ予定）の試験と位置付けており、北海道衛星プロジェクトとしては初の宇宙への衛星打ち上げとなる。（平野明）

来年9月予定「貴重なトレーニング」

超小型衛星は、ロケットのバランスをとるための荷重用に搭載される。道工大ではJAXAへ参加を申し込み、4月下旬に採用が決まった。

超小型衛星は、12㌢四方の立方体で、分離装置を含めて重量は5㌔。宇宙空間でロケットから切り離され、地球から250－600㌔離れた上空を周回する。

内部には、磁気、太陽、温度を察知する各センサーと通信装置、バッテリーなどを積み込み、地上からの指示でプログラムを記憶したマイコンを作動させ、太陽の位置からスピンしている衛星を静止させる姿勢制御実験を行う。実験データは地上へ送信される。

実験は1日で終わるが、衛星は半年から1年間回り続け、内部の温度やバッテリー残量などのデータを送り続ける。

道工大では約30人が衛星の開発にかかわり、衛星名称を「HIT SAT」と命名。7日に開いた設計会議で電気回路が確定し、10月末に完成する見通し。

北海道衛星「大樹」は佐鳥助教授が社長を務め、大樹町に本社を置くベンチャー企業「北海道衛星」が計画しているプロジェクト。佐鳥助教授は「今回の実験は、絶対失敗が許されないだけに研究グループが緊張を持って取り組んだ。本番に向けての貴重なトレーニングになる」としている。

超小型衛星（キューブサット）は東大、東工大で打ち上げに成功しており、道工大が成功すれば国内大学では3例目となる。